





回　り　道

杉本 秀太郎

みすず書房

杉本秀太郎
回 り 道

1981年3月2日 印刷
1981年3月12日 発行

発行者 北野民夫
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京0-195132
本文印刷所 精興社
扉・表紙・カバー印刷所 東京美術印刷社
製本所 鈴木製本所

© 1981 Misuzu Shobo
Printed in Japan
ISBN 4-622-01188-3
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

I 絵画と記憶

ペレアスとメリザンド	3
絵画と記憶	16
1 聖ペトルス暗殺	16
2 牛肉とあけび	22
3 ウッチェロの夢	31
4 三年後	43
水の誘惑	58

花鳥画 66

II 東西小景

余技の画人たち 75

ボードレール(一) 75

ボードレール(二) 79

富岡鉄斎 83

ラスキン 87

木下杢太郎 91

兼常清佐 95

児島喜久雄 99

岡本かの子 104

メアリ・キッド 108

ヴァレリー 113

ゲーテ 117

	ユゴー・・・・・・・・・・・・・・・・	121
	ドビュッシー・・・・・・・・・・・・	126
	西洋芸術論の文章・・・・・・・・	130
	フラゴナール——目の難聴・・・・	137
	ジャン・リュルサの芸術・・・・	144
	たんぼぼの種子——プチ・ラルースのこと・・・・	147
	ステイルとフォルム・・・・・・・・	151
	一 用語・・・・・・・・・・・・・・	151
	二 ステイル——斎藤緑雨の戯文・・・・	158
	三 フォルム——詩の本文と余白・・・・	167
III	しおり	
	無償の行為としての読書——生島遼一『春夏秋冬』	185
	三半規管の王子——吉田健一の小説・・・・	194

地の子アンタイオス——『富士正晴詩集 1922~1978』	202
私の好きな短歌——原田禹雄『錐体外路』のこと	211
しおり	216
本が返ってきた	216
のどの道	218
旧字・旧仮名	220
完全犯罪	222
急所	225
説明なし	227
パリの幕府	229
卵と刃	231
バルチック艦隊	233
うなぎの受け渡し	235

IV 洛中消息

目 次

沖さわら	239
すり鉢	244
季寄せ——わずかな例による感想	248
風神雷神	258
四条派の絵師	260
はなやかな洞穴	264
月令	267
そうめん	267
こおろぎ	269
木犀	270
砧	272
格	274
道具一式——障子張り	276
青蓮院前の大楠	280

残り花——新京極と都踊り	285
泡立っている	291
手放す	297

あとがき

初出一覧

図版目次

図版目次

バオロ・ウツチエロ「聖ジョルジオと竜」	41
伝ジョヴァンニ・ベルリーニ「聖ペトルス暗殺」	45
ジョヴァンニ・ベルリーニ工房「聖ペトルスの象徴物を伴うドミニコ会士像」	51
ジョヴァンニ・ベルリーニ「牧場のマドンナ」	53
ボードレール「ラ・ファンファルロ」	76
ボードレール「白画像」	80
富岡鉄斎「海人のかる藻」挿絵	84
ラスキン「ヴェロナのスカリジェリ家の墓」	88
木下杢太郎「クウバの夜」	92
兼常清佐「蔵書票」	96
児島喜久雄「シユザンヌ」	100
岡本かの子「世界に摘む花」	105

メアリ・キッド「喜望峰に咲く花」	
ヴァレリー「手帖」から	114
ゲーテ「白楊」	118
ユゴー「ねずみの塔」	122
ドビュッシーのバステル画	127
フラゴナール「本読み」	142

カバー・表紙 浅井忠 画

I

絵画と記憶

ペレアスとメリザンド

春待ち遠しさにせかれた冬の夜、メートルリンクの戯曲『ペレアスとメリザンド』を訳しはじめた。白い朝が明け、寒い日がつづいた。

訳し終わったとき、春はなおいっそう遠ざかったように思われた。だれに読ませようか。

おぼろげな輪郭が、訳しているあいだ、ころのうちを去来していたが、それは劇中劇として挟まれている影絵芝居のようであり、しかも光が覚束ないために、その影絵はほとんど捉えどころのない弱々しさを呈していた。

ペレアスに似ていなかったらうか、その人影は、またあるいは、メリザンドに。

これは戯曲である。おなじ気分のまま、空想が劇場に移る。すると、こんな情景が見えはじめる。

戯曲が実際に舞台にかかっているとき、その舞台をしげしげと見守っているペレアス、そしてメリザンドが、客席に紛れている。案外に身近なところ、斜め前にか、すぐとなりにか、いつの間にやら、かれらが声もなく坐り、私とおなじ方向に視線を放っている。舞台の動きのよくわかっている観客のつもりでいるのに、こちらよりもまだもう少しそれがよくわかる観客として、控え目ながらも打ち消しようのない心配をおびたペレアスとメリザンドが、すぐそこに、われわれと同席して舞台を見ている。かれらの姿に気づいた私の驚きは、早く驚きを忘れるために早くに驚いておくといったふうな驚き方なので、ほどなくその存在が気がかりなものにはならなくなる。

舞台上の自分たちの姿に、今こうして逃げも隠れもせず、客席でかれらが立ち会っているのは、自分たちのお芝居であることを露ほども思っていないからにちがいない。多弁なうえに能弁であることが、元来、お芝居の主人公の必須条件であるはずなのに、かれらはふたりとも、いたって寡黙で、口ごもり勝ちで、やむを得ずに仕方なく口にするようにさえみえるその言葉は、かれらの仕草に伴う歌といったふうになってしまい、その音楽性に

よって、言葉の意味はひたすら暗示的となり、あとには身振りの影となった台詞が、一種の楽音となって舞台上に揺曳している。

ひょっとすると、かれらはお芝居の観客のつもりで客席に忍んでいるのではなく、あの身振りの影に聴き入るために、人びとに紛れているのかもしれない。かれらに聴き取ることができるほどには、それがわれわれの耳まで届きかねるのは致し方のないことだ。なぜなら、現にかれらは舞台上で、その身振りをしている本人でもあるのだから。

けれども、舞台上の仕草だけで、かれらはなぜ満足しないのだろう。身振りの影、台詞の音楽を聴き取るために、客席に、いわば異邦人として紛れることをしなれば、かれらの気が済まないのは、なぜだろうか。けっして表面化することがなく、文字通りの主役にはならないのに、たしかに内裡にひそんでいて、さながら運命のように一切の動きを支配し統御しているものに対して、耳を澄まして聴き入りたいという促しがあるので、かれらは主役でありながら主役に収まり切らず、こっそりと主役を演じるといったふうに、主役の席の片隅に、せいぜい小さくなって、切なく身を寄せようとするのであろう。そうしていても早速流れ込んできて空隙を充たすものを、かれらは信じているために、それほど控え目に振舞い、また見様によっては思い切りよく大胆に、ということもできるような振舞いにおよぶのであ

る。

空隙に流入するものはおそらく、かれらの身振りをさそい出した動因そのものであり、魂のうちに動いてやまぬもの、身振りの影となったものの本体である。それはおそらく噴き出した湧き水のごときもの、あるいは水の本性を弁えているような音楽かもしれない。

この戯曲が最も高揚してお芝居らしくなったとき、その直後に破局がやってくる。ペレアスがゴローに刺される。メリザンドが膝も頼りなくよろけながら、小走りに森を駆け去る。気がつくと、客席に、ふたりの姿は消えている。そして人影のなくなった舞台には、泉から溢れる水が、息絶えて横たわるペレアスを包んで流れている。その水音は音韻のかけらを含んでいるので、水が泣いているようだ。

『ペレアスとメリザンド』を訳しているあいだ、私は一枚の絵の追憶のために、少なからず悩まされた。それはかつてただ一度、ロンドンの国立絵画館ナショナル・ギャラリーの一室で見た絵で、『聖ペトルス暗殺』という題をもち、ジョヴァンニ・ベルリーニの作に帰せられている油彩画だった。絵はメーテルリンクのこの戯曲との関連を主張するために私の記憶を借りてよみがえったというふうに見出し、その関連を証明してみせるようにうるさく私に催促するので、関連を既知のこと、証明済みのことと見なし、催促をはぐらかせるという詐術を、私のほうでは思い